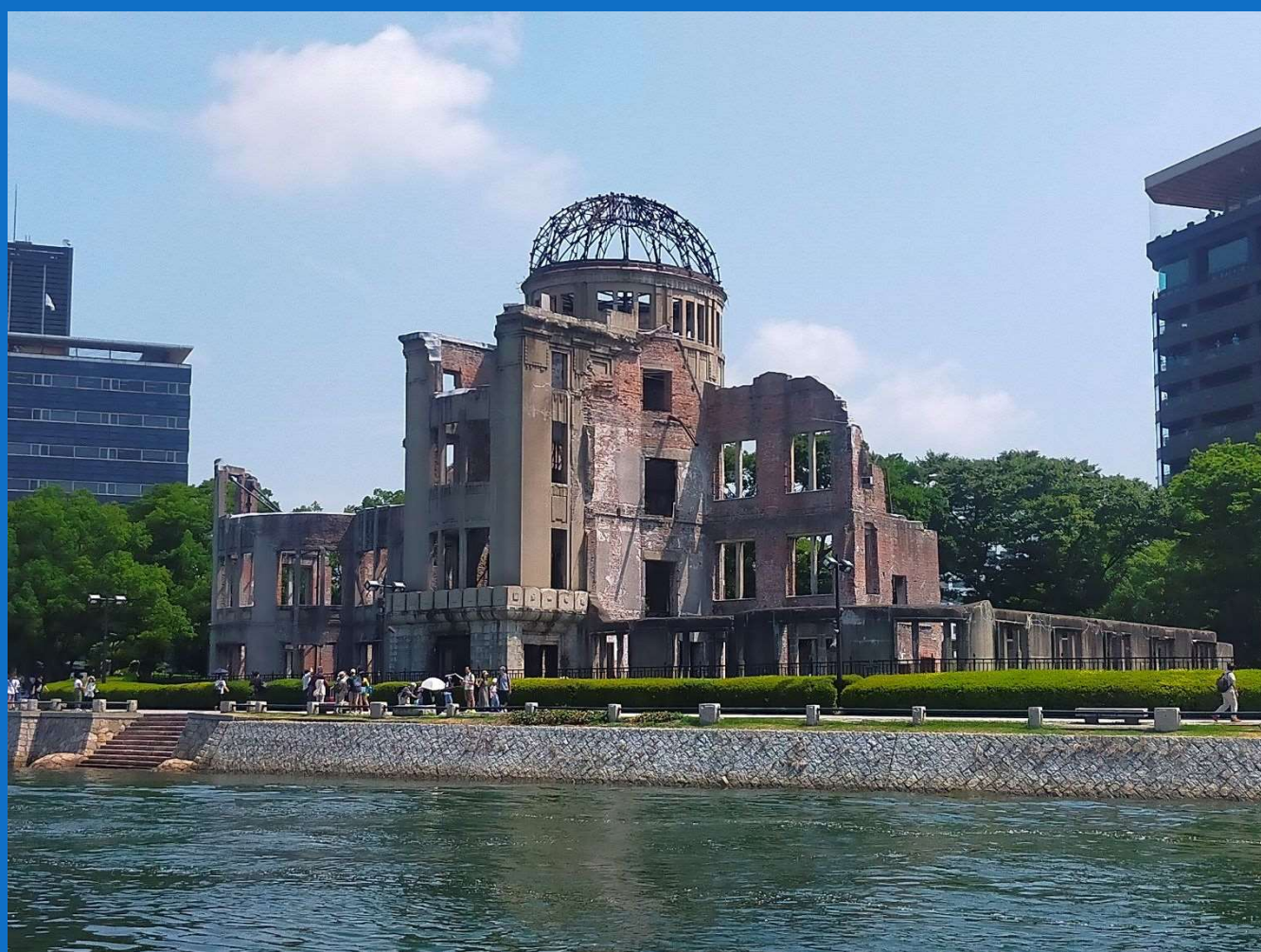


豊島区中学生 広島派遣報告書



2024

目次

非核都市宣言・・・・・・・・・・・・・・・・	1
中学生広島派遣事業の概要・・・・・・・・	3
参加者名簿・・・・・・・・・・・・・・・・	4
中学生報告書・・・・・・・・・・・・・・・・	6
記録写真集・・・・・・・・・・・・・・・・	29
広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式次第・・・・・・・・	31

非核都市宣言

世界の恒久平和は、人類共通の願いである。しかし、核軍拡競争は激化の一途をたどっている。われわれは、人類唯一の被爆国民として、平和憲法の精神に沿って核兵器の全面禁止と軍縮の推進について積極的な役割を果たすべきである。

よって、豊島区及び豊島区民は、わが日本の国是である「非核三原則（造らず、持たず、持ちこませず）」が無視され、われわれの海や大地に核兵器が持ちこまれることを懸念し、わが豊島区の区域内にいかなる国の、いかなる核兵器も配備・貯蔵はもとより、飛来、通過することをも拒否する。

豊島区及び豊島区民は、さらに他の自治体とも協力し、核兵器完全禁止・軍縮、全世界の非武装化に向けて努力する。

右 宣言する。

1982（昭和57）年7月2日

豊島区

（原文は縦書きです。）

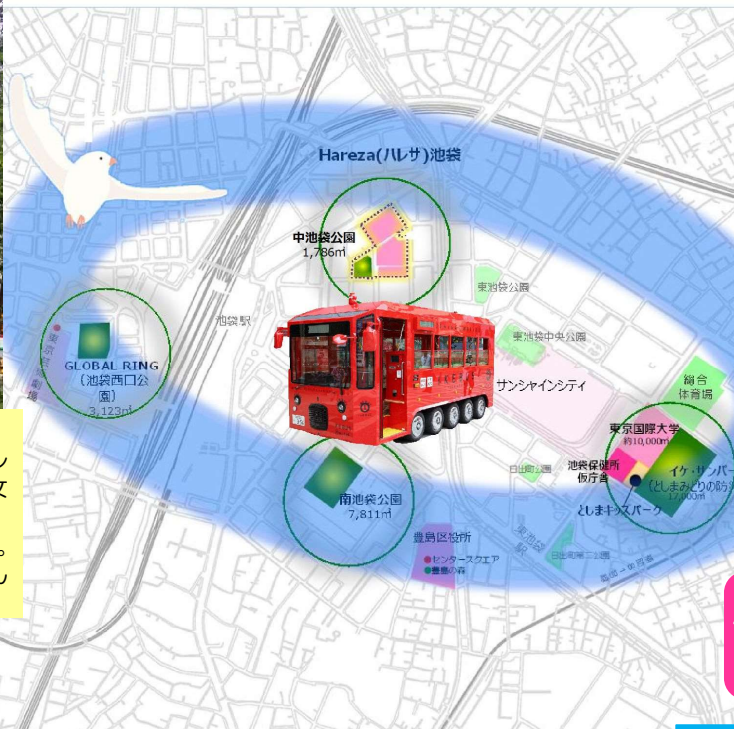
4つの公園から「平和」を世界へ発信

池袋西口公園には「平和の像」、南池袋公園には「哀悼の碑」及び「被ばくアオギリ2世」、中池袋公園には「被ばくクスノキ2世」が設置されています。IKE SUNPARKへの「円盤を投げる平和の青年像」の設置に伴い、池袋駅周辺4公園のすべてが平和を願う象徴となり、まちづくりと一体的に、平和の大切さを発信しています。

平和の像



彫刻家、竹内不忘様作。区民が誇りうる平和のシンボルとして、ハトをテーマにした女性ブロンズ像を、平成2年8月15日に、池袋西口公園に設置。足元には、非核都市宣言を刻んだ碑がある。



被爆クスノキ2世



長崎で被爆したクスノキの種から育てられ、平成15年4月に中池袋公園に植樹。

2022年、画家・彫刻家、田淵隆三様より寄贈

被爆アオギリ2世



広島で被爆したアオギリの種から育てられ、平成15年4月に南池袋公園に植樹。

哀悼の碑



戦後50年の節目にあたる平成7年8月に4・13根津山小さな追悼会実行委員会会員の声により南池袋公園に設置。「城北大空襲」の犠牲となった方々の冥福を祈る。

円盤を投げる平和の青年像



画家・彫刻家、田淵隆三様作・寄贈。区制施行90周年を豊島区の新たなスタートとして刻むため、平和をひらく円盤投げの像を、令和4年7月にイケ・サンパーク（としまみどりの防災公園）に設置。

中学生広島派遣事業の概要

- 目 的

令和6年度は戦後79年となる。区内中学生を被ばく地である広島に派遣することで、戦争の悲惨さ、非核平和の重要性について理解を深めてもらい、またその報告書を発行することにより、中学生だけでなく広く区民一般に非核平和についての意識をもってもらうことを目的とする。

- 参加者 豊島区立中学校 各校代表生徒 16名

- 実施日 令和6年8月5日（月）～6日（火） 1泊2日

- スケジュール

日程（曜日）	時 刻	内 容
8月5日（月）	7：10 8：12	区役所本庁舎集合・出発式 東京駅発
	12：02 12：30	広島駅着 昼食
	14：30	被ばく伝承者による講話
	16：30	てつのくじら館、大和ミュージアム見学
	19：00 22：00	夕食 就寝
8月6日（火）	6：00 7：00	朝食 ホテル発
	7：15 8：00	広島平和記念公園着 平和記念式典
	9：00	広島平和記念資料館、国立広島原爆死没者追悼平和記念館、原爆ドーム 見学
	11：30	昼食
	13：00 13：43	広島駅へ 広島駅発
	17：33 18：15	東京駅着 区役所本庁舎にて解散

参加者名簿

(1) 豊島区立中学校 生徒

駒込中学校	池田 琴糸	駒込中学校	渡邊 めぐみ
巣鴨北中学校	後藤 仁	巣鴨北中学校	湯澤 葵
西巣鴨中学校	秋葉 咲希	西巣鴨中学校	五十嵐 慧
池袋中学校	木村 楓	池袋中学校	下里 奏心
西池袋中学校	朝熊 花海	西池袋中学校	木村 菜々実
千登世橋中学校	橋本 侑季	千登世橋中学校	松瀬 吹落
千川中学校	田島 千尋	千川中学校	鶴田 結凜
明豊中学校	阿部 優雅	明豊中学校	鈴木 道晴

(2) 引率者

巣鴨北中学校長	鎌田 智義	西池袋中学校 主任教諭	福田 貴音
千登世橋中学校教諭	竹内 彩		

(3) 区及び区議会、教育委員会

豊島区長	高際 みゆき	豊島区教育委員会 教育長	金子 智雄
豊島区議会議長	芳賀 竜朗	豊島区議会副議長	ふま ミチ
豊島区議会議員	藤澤 愛子	豊島区議会議員	北岡 あや子
豊島区議会議員	川瀬 さなえ	豊島区議会議員	細川 正博
豊島区議会議員	入江 あゆみ	豊島区教育委員会 指導課長	丸山 順子

(4) 事務局

議会総務課長

倉本 彰

議会総務課係長

藤田 輝

総務課長

星野 和也

総務課職員

池上 桃子

広島で学んだ二日間

豊島区立駒込中学校 2年 池田 琴糸

1. はじめに

私は、広島、長崎の原爆について、曾祖母が被爆者だったこともあり、幼いころから興味や関心をもっていた。中学一年の冬休みに家族で広島に行き平和記念資料館を訪れたこともあった。今回の派遣事業で平和についてさらに知りたいと思い、学校代表として参加することにした。

2. 被爆伝承者による講話を聴いて

講話の中で、沖縄のある資料館に掲げられているという、「平和の最大の敵は無関心である。戦争の最大の友も無関心である。」という言葉がでてきた。私たちは常日頃から戦争や平和について考えているわけではないし、今までは友人と話していてもそういう話を友人とするものではないと思い、意図的に避けていた。だが、そうやって避けること＝戦争に対して無関心であることに気が付いた。そのような話題を避けずに、積極的に話すことが平和について関心をもつ上で大切だと気が付いた。

3. 企画展「ともだちの記憶」を見て

平和記念資料館の企画展「ともだちの記憶」は、広島で生き残った中学生たちが亡くなった友を思い、残した記録が展示されていた。展示物の中にはある少女の日記があり、その中には、「学校へ行かない日ほどたいくつな日はない。」友達と泳ぎに行った日は、「今日は大へんよい日でした。」と書かれていた。友達思いで学校が大好きな十三歳の少女と自分を重ねてしまい、涙が出た。「現代の日本にも、よくいるような普通の女の子ですら、原爆という一つの爆弾でその尊い命を奪われてしまうのか。」と戦争の、原爆の恐ろしさが改めて分かった。

4. 最後に

私は、今回の派遣事業が忘れられない二日間になった。平和記念式典に出席させていただき、広島市の児童の「平和への誓い」を聴いた。広島市の子供たちは、こんなにも真剣に平和について考えているのかと感銘を受けた。私たちも、彼等を見習い、唯一の被爆国である日本の国民として原爆の廃絶を世界に訴えていきたいと強く思う。

平和」を守り繋いでいくこと

豊島区立駒込中学校 2年 渡邊 めぐみ

1. 参加理由

この派遣事業に参加する前は、戦争・原爆について知っていることは何かと聞かれても、「終戦したのは1945年8月15日。広島と長崎に爆弾が落とされた。」このぐらいしか答えることができなかった。いままで授業などで戦争を学んできたが、私は知っているつもりで、全然知らなかった。こんなに知らないことが多いのは日本人として恥ずかしいのではないかな。そう思い今回の派遣事業に参加することを決めた。

2. てつのくじら館

てつのくじら館に到着すると、「三菱重工」という文字と、とても大きな潜水艦があり、驚いた。なぜなら、私の父は三菱重工に勤めているからだ。私は初めて父の会社で造った潜水艦を生で見ることができた。また、様々な展示がある中で私が一番印象的だったのは潜水艦に実際に乗る事ができるコーナーだ。私は、潜水艦「あきしお」に乗艦した。潜航中の環境や生活を体験することができた。体験してみて、本物の自衛官になったような気持ちになり、当時の乗組員の思いが少しだけだがわかった気がする。

3. 平和記念資料館

平和記念資料館では、戦争の悲惨さを感じた。なかでも心に残っているのは、「母から娘への手紙」だ。この手紙は、被爆し、生死をさまよう母から娘へ送られたものだ。手紙には「皆にかわいがっていただけるような良い子になってください。もう泣き虫じゃないでしょうね。かわいい咲子ちゃん。 母より さよなら」と書いてあった。私はもしこのことが自分の身に起きたらと想像してしまい、思わず涙をこぼした。私は、資料館を出たとき、改めて平和の尊さを感じた。

4. 「平和」を守るために

先日、10月11日に、ノーベル委員会が今年のノーベル平和賞を日本原水爆被害者団体協議会を授与すると発表した記事を読んだ。来年、日本は終戦80年を迎える。現在、被爆体験者の方は高齢化してきている。そこで、私たち若い世代がヒロシマで起きた悲劇を忘れることなく、平和な社会を作っていくべきだと考える。私は今の日本は平和だと思う。しかし、今の日本の平和は簡単に崩れてしまうのではないかと考える。現在世界では戦争が起きている。私にはこの戦争を終わらせるほどの力はない。だが、友達や家族に平和を守ろうと呼びかけることはできる。そうした小さな活動を積み重ね、平和な社会をつくっていきたい。



思いやりの心をもつことができる社会を

豊島区立巣鴨北中学校 2年 後藤 仁

私は平和な世界とはどのような世界なのか考え、理解することを目標に、広島派遣事業に参加しました。

被爆伝承者による講話では、村上さんが戦争、原爆とは何かを詳しく教えてくださいました。「国家総動員法」といって、戦争のためなら人的物資や物資の統制を政府が審議をせずに実行できるという法がつくられたそうです。また、原爆が落とされた際、2キロメートル先でも自然と火がつくほどの熱が発生したとおっしゃっていました。原爆をうけて生き延びた人たちは、これまで何度も癌などの様々な病に苦しめられてきたそうです。

大和ミュージアムやてつのくじら館では、当時使われていた兵器を見学することができました。特に印象に残っているのは「機雷」です。機雷には、船に直接触れて爆発するものだけでなく、船の音を感知するものもあると知り驚きました。しかし、このような技術も人を殺してしまうために作られたものだと思うと胸が苦しくなりました。

広島平和記念資料館では、この事業に参加する前では見たこともなかった、想像を絶する光景が記録されていました。ボロボロになった三輪車やひどく火傷を負った背中など、原爆が残した影響を強く感じました。

村上さんは、話の最初に「お互いが自分なりの正義を尊重し合う結果、戦争につながる。」とおっしゃっていました。そのため、私は、平和の実現できる世の中とは、一人一人が意見を主張でき、それと同時にお互いが思いやりの心をもつことのできる社会だと考えました。そして、もう二度と同じ過ちを繰り返さないためには、まずは身近なところから、お互いの考えを思いやりの心をもって尊重し合うことが大切だと思います。

未来をつくる

豊島区立巣鴨北中学校 2年 湯澤 葵

この派遣学習の存在を知ったとき、同じ志をもった仲間と平和について学べる貴重な機会だと考え、今回参加を希望しました。

広島に着き、まず被爆体験伝承者である村上さんのお話を伺いました。「戦争はあるとき突然やってくるものではない」という言葉から、今の私たちの行動も全て戦争と繋がっているのだということに気づきました。

2日目、平和記念式典に参列し、黙祷を捧げました。私はこの瞬間に、あの悲惨な出来事が起こったということがとても信じられませんでした。平和への誓いの中に「79年前と同じように、生きてくても生きることができなかった人たち、明日をともに過ごすはずだった人を失った人たちが、この世界のどこかにいるのです。」という言葉がありました。私たちは今こうして何気ない日常を送れているけれど、世界にはかつての広島のような恐ろしい日々を過ごしている人もいるのだということに胸が痛みました。そして一刻も早く、誰ひとりこのような辛い思いをしない世界にしたいと思います。

その後向かった広島平和記念資料館にあったのは、ボロボロになった服、焼け焦げた三輪車、人影の残った石などでした。皮膚に紫色の斑点があらわれた人や、舌から出血した兵士、火傷の手当てを受ける少年の写真などもあり、とても目を背けたくなりました。見学が終わった後は、衝撃で言葉を発することができなかったです。

今、広島のまちは、高層ビルが建ち並び、緑に溢れており、かつて原爆が投下されたとは考えられないほど発展しています。これは広島に住む人々などの努力があってこそだと思います。今回の派遣学習を通して、私も平和をつくる未来の担い手なのであるということを痛感しました。今回の学びを伝えるとともに、相手の命も相手からすれば自分の命だということを胸に刻み、思いやりの精神をもって生活していきたいです。

伝え続ける大切さ

豊島区立池袋中学校 2年 木村 楓

私がこの派遣事業に応募した理由は、平和とは何か、平和との向き合い方を深めたい、何より、平和な世界で生きたいと強く思ったからです。

今回の派遣の中で、私が一番心に残っているところは、平和記念資料館です。平和記念資料館は、被爆者や遺族の視点で展示されており、中に入ったときから怖くてたまりませんでした。また、実物展示や写真展示が数多くあり、言葉にならない感情が湧き上がってきたのを覚えています。核兵器の恐ろしさと平和の大切さについて身をもって感じることができました。広島、長崎の街並みは、緑も多く、とてもきれいに整備されていて、79年前に本当の核兵器が落とされたのかと疑うほどでした。しかし、原爆ドームをこの目で見たとき、戦争の後がくっきりと残っていて、本当にここで亡くなった方が大勢いたのだと改めて思いました。また、広島、長崎の街がきれいに整備されているのは、核兵器ですべてが焼け野原になってしまったからなのだ、と考えることもできました。

私たちが参加した79回目の記念式典では、新たに5,079名の原爆死没者名簿の追加奉納があり、全体で34万4,306名の名簿となりました。この派遣に参加し、「黙祷」をする、8月6日の8時15分にこの場所で、戦争、核兵器によって亡くなった大勢の方たちは無念だったろう。悲しかっただろう。辛かっただろう。痛かっただろう。苦しかっただろう。と思いました。核兵器を使用した結果起きた悲惨さを、唯一の被爆国である日本は伝えなければならない。そして、二度と繰り返さないと約束することが、亡くなっていった大勢の方たちの魂を慰めることだと思いました。同じ過ちを繰り返さないように考え続けること、伝え続けることを約束したい。核兵器のない世界を願う大切さ、戦争のない世界を願う大切さを改めて学びました。

10月11日に日本原水爆被害者団体協議会がノーベル平和賞を受賞しました。核廃絶を願う被爆者の声を唯一の戦争被爆国・日本から世界に発信し続けてきた地道な活動が評価されました。「ヒバクシャ」は世界に通じる言葉だそうです。私はこの受賞を誇らしい気持ちで喜びましたが、裏を返せば、核兵器が実際に使われる懸念がかつてないほど高まっていると考えられるということでもあります。私たちの力や声は小さいけれど、ノーベル平和賞を受賞できたのだから、諦めないで訴え続けなければいけないと改めて思いました。

平和とは何か

豊島区立池袋中学校 2年 下里 奏心

私は「戦争」「平和」「原爆」という言葉を今までに何度も耳にしたことがありました。本やテレビ番組、学校の授業でも戦争を題材としたものが多いと感じています。そして、夏休み前に映画化されていた小説で気になっていたものがありました。それはフィクションでしたが戦争に関するものでした。今から79年前、毎日爆弾が降ってくる恐怖に怯え、食べる物に困窮していた時期が本当にあったのかと思い、強く印象に残りました。また、「戦争」「平和」「原爆」について自分の中でより鮮明なものにしたいと考えるきっかけにもなりました。「当時の生活は今よりどれほど辛いものだったのか」、「私の当たり前が当たり前でないこと」を知り、戦争を防ぐ考えをもちたい、日本だけでなく世界にも目を向けられるようになりたいと思ったことが、広島平和式典派遣事業に応募した理由でした。

この派遣事業に参加し、平和記念資料館では、被爆者の方が着ていた服、使っていた物などの実物展示やその時の実際の写真の多くを、原爆ドームでは、原爆が爆発した場所で自然の中に残る戦争の跡を肉眼で見ることができ、今回の目的としていた、肌で感じることができたと思います。

被爆伝承者の方の講話では、自己主張が戦争に繋がること、平和の最大の敵である無関心が戦争を招くことなどを学ぶことができました。私はその話を伺い、理想の世界は、戦争なんて起こらない「平和」が当たり前な世界なのではないかと考えました。しかし、現実には、平和の祭典であるオリンピックが行われている時にも、世界のあらゆる国・地域で戦争が起きています。今もなお、苦しんでいる人がいるからこそ、「平和」はとても大切で、かけがえのないものと気づき、守る努力をしていかなければならないのだとわかりました。

派遣事業に参加する前、被爆者の方も高齢化などで少なくなっているとテレビで見たことがありました。今回、伝承者の方の講話を聞いたように、私たちも語り継ぎ、「平和」への無関心をなくしていくのがこれからの課題だと感じました。

「一日一日を大切に」

豊島区立西巢鴨中学校 2年 秋葉 咲希

私は広島派遣事業に参加するにあたり、広島への原爆投下についての予備知識が全くなかったので参加するのには戸惑いがありました。しかし、知識がないからこそ見たもの、聞いたものすべてが素直に感じられると思い参加することを決意しました。

特に印象に残ったのは、被爆者の1人である兒玉さんのお話です。当時の兒玉さんの様子を語った言葉一つ一つには、重みがあり、特に「今をあたりまえだと思ってはいけない」という言葉が心に刺さりました。よく晴れた8月6日の朝、兒玉さんは12歳でした。8時15分、空がピカッと光り、意識を失いました。倒壊した校舎から脱出し一命を取り留めたものの、周りには頭が血まみれになっていたり、皮膚が垂れ下がっていたり、また目がこぼれ落ちていたりする友達が大勢いたそうです。この光景を兒玉さんは生涯忘れませんでした。そこで生き延びた兒玉さんも、戦争から50年経った60歳頃に、被爆時、多量の放射線を浴びたことによる後遺症で、20回を超えるがん手術を行いました。今でも放射線による後遺症が被爆者を苦しめていると思うと、とても胸が締め付けられます。

今の広島は当時の面影を全く感じさせないほど活気あふれています。色鮮やかな日常を取り戻せたのは奇跡だと感じました。79年前の8月6日の朝。学校や会社へ向かう途中、たった一つの原因で多くの人の日常、そして命が奪われました。当時の人々は生きてくても生きられなかったのです。そんな人が大勢いるのに「ただなんとなく日々が過ぎてしまった」はもったいないと感じませんか？私は「学校に行って勉強する」「遊びたいから遊びに行く」があたりまえだと思っていました。しかし、兒玉さんの戦争体験談を聞き、もし自分が被爆したら…と考えると「今、何事もなく過ごせているだけで幸せなのだな」と思うようになりました。

ホテルに戻り、友人とテレビでオリンピックを観ました。1日、広島戦争の残酷さを目の当たりにしたからこそ、「平和の祭典」であるオリンピックを観て、平和の尊さを実感しました。「願うだけでは平和は訪れません」

「未来へつなげる大切さ」

豊島区立西巣鴨中学校 2年 五十嵐 慧

近い将来、第二次世界大戦を生き抜いた人が0になる日本で、戦争を知らない私たちは、語られる側から語る側へと変化していきます。その時、「語るほど知らない」「私からは何も言えない」と他人任せになってしまえば、いずれ人類のもつ戦争の記憶は薄れ、過ちが繰り返されると考えました。将来そのようなことにならないよう、実際に現地へ向かい、そこで得たものを発信することが大切だと思い、この事業に参加しました。

被爆伝承者である村上さんのお話、大和ミュージアムに展示されていた特攻兵器、平和記念資料館に寄贈された遺品、絵、写真。これらを通して私が学んだことは、戦争の凄惨さです。特に衝撃を受けたのは、原爆ドームでした。もともと、原爆ドームは広島県内の物産品を展示・販売する「広島県物産陳列館」という施設であり、写真から見るに、洋風のとてもきれいな建物でした。だからこそ、現在ドームを形作っていた骨組みが現れていたり、瓦礫が散乱したりしていることなどから、原爆の威力や当時の悲惨さが伺えました。

しかし、その景色から学べることは戦争の恐ろしさだけではありません。原爆ドームの周りには、きれいな緑色の木々が見えます。これは、当時、「75年間は草木も生えぬ」と言われていた広島地における、戦後復興を遂げたすべての人達の努力の賜物といえます。悲惨な戦時中・あるいは戦後から、皆で手を取り合い復興するまでの時間の流れを感じることができました。

現在も、ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエルによるガザへの攻撃など、今も武力による争いが絶えず、国家や人間同士の緊張感は増す一方です。そんな中、戦争に肯定的な意見が生まれたり、核の使用の正当性が語られたりしていますが、決してそんなことはありません。「戦争はあるとき突然やってくるものではない。」被爆伝承者である村上さんの言葉です。

戦争は、戦争の記憶が風化し、関心が薄れたときに起こります。私達の普段の意識が戦争を起こすことにも、なくすことにもつながるのです。今を「戦前」にしてしまわぬよう、私達は学び続けなくてはなりません。戦争の恐ろしさを、平和の尊さを。

受け継がれる広島への思い

豊島区立西池袋中学校 2年 朝熊 花海

皆さんは、どんなときに幸せを感じますか。家族とご飯を食べているとき、友だちと意見があって楽しく盛り上がり話をしているとき、好きなことをしているとき、未来に夢を持ったときなど小さなことでも幸せだと感じ、私は幸せを感じながら楽しいと思って生きることが広島への派遣行事を通して一番大切だということを学ぶことができました。

広島では昨日までいつもと同じだった街の姿や人々などが次の日の1945年8月6日午前8時15分、この世のものとは思えない姿になり人々は熱線を浴び大やけどを負い、多くの広島にいた人々が被害を受けました。

私は、豊島区の代表として広島に派遣されることになり、実際に被爆の伝承者の方のお話、鉄のくじら館、大和ミュージアム、毎年広島で行われている平和記念式典の参列、広島平和記念資料館、原爆ドームの見学をしました。被爆者の伝承者の方のお話では、広島や長崎の原爆の被爆者の平均年齢が85歳となっている今、伝承者の方の貴重なお話を聞くことができました。

また、私が特に衝撃を受けたのは原爆ドームの見学です。原爆ドームは写真で見たことがありますが、実際に広島で現地で見ると、原爆ドームはとても見ている人の目に焼きつけるような迫力がありました。原爆ドームの上を見ると上の部分は骨組みだけが残っていて、下の建物自体も、元々の建物の形がなくなり、その原爆の威力がとてもリアルに伝わるくらいの迫力や恐怖感がありました。広島のようにたった一発の原爆で沢山の命が傷つき、何も悪くない幼い子供達が被害にあっていたと考えるとすごく胸が痛くなり、もうこんな何も悪くない人々が被害にあうような戦争は絶対にしてはいけないと感じました。

そして、私はこの広島派遣行事を通して、今ある幸せやこれからの私達がこの、戦争について受け継いでいき、沢山の人の戦争の恐ろしさや平和の大切さを、学校を通して伝えていきたいと感じました。

広島派遣事業に参加し感じたこと

豊島区立西池袋中学校 2年 木村 菜々実

1. 参加にあたっての決意

私はこの広島派遣の話を受け、すぐに「行きたい」と思いました。なぜなら、小学5年生の時に平和記念資料館に行き、戦争の現実には耐えきれず途中退館しました。そのこともあり過去に受け止めきれなかった戦争と向き合い、平和を学びたい意志のある人たちと戦争の悲劇と命の重みについて知りたいと思ったからです。

2. 平和記念資料館に訪れて

平和記念式典の後に訪れた平和記念資料館はとても印象に残っています。幼い子の服や有害ガスによる影響が書かれた長い文章などが展示されていて、その一つひとつを見るたびに涙が溢れ心に深く刺さりました。1945年8月6日8時15分。その一瞬で変わった広島風景は、戦争はあってはならない！命とは尊いものだ！と語っているように思えました。原爆によって、8時15分に止まった時計や曲がりに曲がった三輪車など背を向けてしまいたい物を見て戦争は思っていたよりも、もっともっと怖く苦しいものだと思い、私は戦争が無い世の中であって欲しいと強く思いました。

3. 被爆伝承者のお話を聞いて

冒頭で話をしてくださった「人は想像することが大切」という言葉が印象的でした。それは「相手のことを考えることができたなら戦争は起きなかった」「どうして握手をする手で銃を撃ってしまうのか」ということです。私達の手は平和を示すことが出来るし武器にもなってしまふ。だから、しっかりと使い方を考えなければいけないと学びました。

4. 終わりに

この2日間の派遣で、身近ではなかった戦争の恐怖と平和を守るための努力について深く学びました。戦争によって罪のない命が亡くなり、障害や差別が起こった事実を間近で感じられ、とても貴重な体験でした。日本は世界で唯一の被爆国であり、そこに住む者として今一度平和や命について考えて広めたいと思います。その事を考える機会をくださった先生や、関わっていただいた方に心より感謝いたします。

79年前の広島を「知る」「伝える」

豊島区立千登世橋中学校 2年 橋本 侑季

1. はじめに

私は、この中学生広島派遣事業を知って、すぐに行きたいと思いました。姉が学校で広島を訪れていたり、小学生の時、読書感想文で学んだことで、原爆や戦争について興味があったからです。実際に行ってみることはなかったのでこの機会を大切にしたいと思いました。

2. 平和記念式典に参加して

8月6日午前8時ごろ、広島市で平和記念式典が行われました。79年前のその日、原子爆弾が広島を襲いました。たったひとつの爆弾で、半径2km全壊・全焼。そして、約14万人が亡くなりました。式典では、厳しい暑さの中たくさんの方が被爆者への思いを募りました。私はその参列者の1人であることを再認識し、この状況がどれだけ貴重で奇跡なのかを思い知らされました。ただ、いだけじゃだめなんだと思い、自分なりの考えを持ち、これからの平和を祈りました。

3. 広島平和記念資料館

広島平和記念資料館には、とても笑顔で可愛い子供たちと先生の写真がありました。しかし、足を進めると、全身に火傷を負った男性や、傷を負った子供たちの写真がありました。これを見た時、こんなことが実際にあったなんて考えられないほど、原子爆弾に対する恐怖心が芽生えました。中には、「三人の中学生の遺品」と書かれてあり、横には黒く焦げてしまった衣服。また、変形してしまったお弁当箱など、悲惨な光景がたくさんありました。

4. 広島とこれからの未来

私は、この広島派遣事業を通して、数え切れないほどの驚きと発見がありました。原爆はこれからの人生を奪い、心も引き裂くような、あってはいけないものだ確信しました。この過去が変わることはないけれど、未来を変えることはできると私は思います。私は、過去の悲劇を未来では起こしてはいけないと胸に刻んでいきたいです。また、この経験をちゃんと伝えて繋げなければいけない。広島に行って終わりじゃなくて、もっと広島と平和について理解を深めていきたいです。

平和の最大の敵は無関心

豊島区立千登世橋中学校 2年 松瀬 吹落

1. はじめに～私が広島派遣で感じたこと～

今回の広島派遣で印象に残ったことは、伝承者の村上さんが講話で話されていた「平和の最大の敵は無関心である。また、戦争の最大の友も無関心である」という言葉です。最初は「どういう意味なの？」と不思議に思っていました。しかし2日目に様々な経験をさせていただいて、だんだんと意味を理解してきました。

2. 平和記念式典に参列して

今回、平和記念式典に参列するという、とても貴重な機会をいただきました。8時15分、原爆で亡くなった方々に黙とうを捧げました。「79年前のこの日、この時間に、たった一つの爆弾が大勢の人の命を奪った」そう考えるだけで恐ろしい気持ちになり、また私たちと同じくらい、あるいはそれよりも若い子たちも大勢亡くなっていることを考えると、より重い気持ちになりました。

たくさんの方の平和宣言を聞いた後、広島の小6年生が「平和への誓い」を読み上げていました。これを聞いた後、私が小学6年生のとき、このように平和のこと、広島のことを考えていたのかと思いました。正直、ここまで深い考えをしていなかった。「8月6日に大きな爆弾が落ちたんだ」と、とても甘く捉えていた。その被害に遭った方々の傷も知らずに。これこそが「無関心」なのではないかと思いました。これが連鎖していつて未来に残らなかったら、また同じ過ちを繰り返してしまうのではないか。慰霊碑に書かれた誓い『安らかに眠ってください 過ちは繰り返しませぬから』を破ってはいけないと思いました。

3. 平和記念資料館に行って

式典に参列した後、平和記念資料館に行きました。正直、ものすごく怖かったです。目をそらしたくなるものばかりでした。しかし、絶対に目をそらしてはいけないことだと実感しました。私が印象に残った展示は、被爆者の方の遺品と一緒に言葉が残してある展示です。その言葉には「苦しみをつづっているもの」「後悔を残しているもの」「伝えたいことをすべて書いているもの」「一言だけ残しているもの」などたくさん種類がありました。私が今でも鮮明に思い出せる方が一人います。その方はよれた茶色くなったワイシャツとともに「苦

しい 苦しい 苦しい」と残しているメガネをかけた青年です。他の方は家族への感謝などを書いている中で、「苦しい」の三文字だけを並べていて、個人的にはすごく異質に見えました。しかし、この「苦しい」はどの苦しみののか。外傷的な苦しいだけなのだろうか？また、言葉では言い表せないほどの苦しさをたった一つの爆弾が大勢の人に引き起こしたのか。など、たった 3 文字で当時の様子が想像できました。

式典後だったのでお客さんもとても多く、その中に目に留まる方がいました。資料館の最初の方の展示に CG で広島に原爆が落ちる様子を映した展示がありました。外国人の女性がカメラを構えながら、首を横に振りながら涙を流していました。私は、国が違う方でも広島にあった悲惨な事実を泣きながら感じてくれることをすごく嬉しく思いました。いま、ロシアがウクライナに対して核で威嚇していると聞きましたが、すべての国の人がこの女性のように核や広島に対して関心を持ってほしいと思いました。

4. 平和記念公園を巡って

資料館に行ったあと、平和記念公園に行きました。資料館で、講話をしていただいた村上さんにお会いしてガイドをしていただきました。公園の中には地面の下にある当時の広島の家が展示されていた。石の段差や焼け焦げた畳の跡など痛々しい痕跡が残っていました。また、映像で被爆前にあったであろう平和な家族の様子が映し出されていて本当に一瞬ですべてが失われたのだなと思いました。

私が公園で印象に残ったのはアオギリの木です。初めて見たときは緑が多くきれいだなと思っていました。しかし幹にある大きな傷や治そうとうねっている樹皮を見て原爆の恐ろしさを痛感した。しかし、被爆当初はなかった葉っぱが生い茂っていたり、種が飛び、アオギリ 2 世が頑張っているのが目に止まった。また、豊島区の南池袋公園に広島で被爆したアオギリの種から育てられたアオギリ 2 世が、中池袋公園で長崎で被爆したクスノキ 2 世の種から育ったクスノキが生えていると聞いて、私達の身近な地域にも残り続けてほしいと思いました。

5. 終わりに～残して行く、伝えていく～

私が広島駅で新幹線を降りて一番最初に思ったことは「本当にここに原爆が落ちたの？」ということです。広島は、とても綺麗で高い建物も多く、緑も茂っていて発展した都市という感じでした。しかし、原爆ドームや公園の下、アオギリなど調べていくうちに段々と現実味を帯びていきました。

豊島区でも、本やインターネットなどを使って調べたりもしていましたが実

中学生報告書

際に見ることで肌に感じてより関心を持つことができました。私は広島に関してだけでなく、たくさんの方に関心を持ったりすることで防げるんじゃないかなと思いました。村上さんは講話で「私達は正しいを英語に直すと頭文字が戦争になる」とおっしゃっていました。(We Are Right→War)そこで戦争や争いを防ぎ、平和に穏やかにするには、自分だけが正しいのではなく相手に関心を持ち、言い分も聞いて理解していくのが大事なのではないかなと考えました。

原爆投下は昔に遠い地域で起きたことではありません。同じ日本で、今も後遺症に悩んでいる方がいらっしゃいます。私達が慰霊碑に書かれた誓いを守るためにできるのは、核や戦争に関心を持ち、それを未来に伝えていくことだと思います。同じ過ちを繰り返さないように、同じ気持ちになる人を出さないようにするのが、唯一核の被害を受けた日本に生まれた私達にしかできないことだと思います。

私がこんなに核や戦争について関心を持てたのは、広島派遣事業があったからです。引率してくださった先生方、区長さんはじめ区の職員の皆さん、ありがとうございました。中学 2 年生の私達が選ばれた理由をしっかりと考え、未来に伝えていこうと思います。本当にありがとうございました。

平和のために

豊島区立千川中学校 2年 田島 千尋

今回広島派遣事業に参加を決めた理由は、戦争を許さないと思う人をもっと増やしたいからです。

私は2日目の見学が記憶に強く残っています。私たちは2日目の朝、平和記念式典に参列し、式典開始から数分、献花の時間になりました。広島市長、広島市議会議長と続く中で、被爆者代表の献花がありました。被爆者代表の献花は、投下から79年経っているため、当たり前ですが79歳を超えるお年寄りの方が行っていました。それをみて、私が大人になる頃にはもう被爆者代表の献花は残っていないのかもしれないかと不安になりました。ここから20年も経ってしまったら直接話を継いでいける人がいなくなってしまうと思ったからです。

私たちが原爆資料館に入り、最初に見た写真は、同じ年くらいの子達の集合写真でした。しかし、直後に見た写真は、原爆が投下された後の何もかもが崩れた広島でした。

写真の子たちが私たちと同じように笑っているのを見て、「私たちが二度と戦争をしない保証はないんだ」と、急に身近に感じました。原爆ドームでは、被爆者の顔写真と一緒に、「爆心地から〇〇メートル」と書かれていました。また、亡くなった中学生の着ていた服や、8時15分で止まった懐中時計も展示されていて、原爆がどれほどすさまじい威力だったのかを遺品を通して感じる事ができました。

でも戦争が身近にない今の私たちには、数字だけでは当時ほどの威力は絶対に想像できないと思います。現在の広島は、戦争当時の悲惨な情景は一切なく、美しい景色が広がっていました。しかし、原爆ドームは今でも投下されたときのままの姿で残っていて、近くまで見に行ったときには、「もう二度と戦争なんてするな」と直接言われている感覚でした。

広島に原爆が投下されてから今年で79年が経過し、もう街中にはほぼ戦争の名残はなくなって見えました。それに今はもう、当時の被爆者は少なく、語り継げる人たちもあまり多くありません。それでも原爆当時の広島の景色を、決して忘れず、第三者である私たちが伝えていきたいです。そして次の79年後でも、世界から戦争がなくなり平和に過ごせることを心から願います。

広島での学び

豊島区立千川中学校 2年 鶴田 結凜

私はこの夏、豊島区の中学校広島派遣事業に参加し、広島で起きた悲劇について深く考え、知らなかったことを発見し、原子爆弾の恐ろしさと被爆者が味わった苦しさを知ることができました。

私が広島へ行き、心に残ったことは二つあります。一つ目は、原爆ドームの見学です。原爆ドームがどのようなものかは、以前写真で見たことがありました。ですが、実際に広島へ行き、原爆ドームを見たときは、写真で見たときよりもとても迫力がありました。それは、他の建物とは違い、歴史を繋いできた唯一の建物だから、そのような迫力や魅力があるのだと思います。周りに建設されている建物と見比べると、どれほどボロボロな状態であるかが、ひと目見て分かりました。ですが、広島県物産陳列館の面影は原爆ドームにちゃんとあり、今も建物が壊されず、大切に残されていました。

二つ目は、広島平和記念資料館の見学です。記念館には、入ってすぐのところに原爆投下からの日数と最後の核実験からの日数が記録された時計があり、原爆投下から28,855日、最後の核実験から84日と書かれていました。原爆投下後からこんなに経っているのかと不思議に思う反面、最後の核実験が最近であることにとても驚きました。資料館の中に入ると、沢山の遺品が納められていました。衣服は全て破れた状態で、弁当箱や時計、眼鏡は形を残しながらも丸焦げになっていました。遺品と亡くなった持ち主の写真が飾られており、中には子どもの写真も数え切れないほどあり、とても胸が痛くなりました。私は、今回の派遣授業で広島へ投下された原子爆弾の事を深く知ることができました。この経験を人生の中で生かしながら、一日一日を大切にしていきたいと思います。そして、原子爆弾で引き起こされた悲劇を沢山の人の人知ってほしいです。



広島派遣事業に参加して

豊島区立明豊中学校 2年 阿部 優雅

1. 広島派遣事業への思い

僕がこの広島派遣事業で主に学びに行ったことは、「平和、正義、戦争には、どのような関わりがあるのか。」「世界がずっと平和でいるためには、僕たちができることはなんなのか。」という2つのことです。戦争の悲惨さを学び、よりよい未来にしていけるにはどのようなことが大切なのかを考えました。

2. 平和記念資料館

平和記念資料館には今の生活からは想像ができないような広島の街の写真がありました。写真には、体が焼け皮膚が垂れ下がっていたり、体全体に包帯が巻かれている人の写真がありました。また、被爆者が当時身につけていたであろう、ぼろぼろになった鞆や穴だらけで黒く染まったTシャツなどがたくさんありました。また、被爆して亡くなった方には中学生も多く、自分と同年代ということを考えると、心が痛みました。実際の資料を見ると、原爆への恐怖心がより現実的なものになりました。幼い子から、お年寄りの人までたったの一瞬ですべてのものを失い、苦しめた原子爆弾は恐ろしいものだと改めて理解をするのと同時に、これ以降決して原子爆弾を使用してはいけないものだと思います。

3. 原爆ドーム

原爆ドームは今にも倒れてしまいそうなほど、建物とは思えないほど、ボロボロでした。あの状態で保存しておくことは、原爆が過去に本当にあったことを強く今の人々に訴えかけていると思いました。取り壊してきれいにしてみれば、戦争と原爆の記憶は日を重ねるにつれて薄れていってしまうと思います。



4. 平和記念式典に参列して

平和記念式典では、原爆が炸裂した時間に犠牲となった方々に対して黙祷を捧げました。あの時、あの瞬間に、あの惨劇が起こったと思うと自然と体が震え、鳥肌が立ちました。「平和への誓い」の中にあった、「ある被爆者は言います。あのときの広島は『地獄』だったと。」というところから、建築物や経済などが復興しても、大切な人を失い、傷つき続けた人々の心はなかなか元に戻らないと思いました。

5. まとめ

僕は広島派遣事業に行って、「正義」とは自分にとって正しい行動や行いのことだと考えました。国同士の正義がぶつかり、自分達の正義を押し通していくから、平和が崩壊し、戦争が起こる。僕はこれからの世界が戦争のなく平和であり続けるためには、自分の正義を押し通すのではなく、相手のことを知ろうとする、視点を広く持つことが大切だと考えました。僕たちの力で戦争を止めるのは無理かもしれない。けれど、一人ひとりが相手のことを理解しようとする姿勢を持つことで、少しずつ平和への考え方は変わり、これが僕たちのできる「平和への第一歩」なのだと思います。

広島での平和学習

豊島区立明豊中学校 2年 鈴木 道晴

1. 語り部さんの話 「平和のとりでを築く」

被ばく者である兒玉光雄さんの体験を伝承者の村上さんが語ってくれた。村上さんは兒玉さんの被ばく体験と、この体験をもとにした平和を思う心について語った。広島に原爆が落とされるまでの太平洋戦争の動向や実際の被爆体験を事細かに説明し、原爆の最も恐ろしいところは長い間人々を苦しませ続けることだと語った。「正義の押し付け合いは絶対に駄目だ。」とも語った。

2. 兒玉さんの体験

- 学校の校舎の中で被爆。
- 顔にはガラス片が刺さり、校舎の底からは様々な声が聞こえた。
- 日本赤十字病院前は被爆した人たちで埋め尽くされていた。
- 被ばく線量は半致死線量を超えており、61歳のときには直腸がんを患い、その後も胃がん、皮膚がん、甲状腺がんに苦しみ、20回を超える手術を行った。
- 「二度と私のような染色体異常を持った身体の人間を、地球上に作らせてはいけない。」「自分と同じようなつらい思いをもう二度と誰にもさせたくない。」「人類と核は共存し得ない」といった言葉を残している。

3. 兒玉さんの思い

- 生き抜こうとする強い思い、諦めずに行動する力、「生かされた命」として感謝の気持ち→強い使命感へ。
- 一人ひとりが行動を積み重ねていく→平和な社会を作ることにつながる。

4. 感想

実際の被ばく体験はとてもリアリティがあり、改めて原爆・戦争は恐ろしいものだった。兒玉さんの思いに深く感動した。この思いを忘れてはいけないと思ったし、この学習を通して感じたことは日本に実際にこのようなことがあったという、人生において知るべきことだと思った。

5. 平和記念式典に参加して

平和記念式典では、内閣総理大臣をはじめ日本だけでなく世界各国から様々

な人が参列し、平和への思いを話し、考えていた。式辞では、日本国憲法の前文「全世界の国民が等しく、恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」から、世界全体で平和を享受できるよう強い信念のもと、連携することの重要性が述べられていた。

ある被ばく者は「私たちは、今こそ過去の憎しみを乗り越え、人種、国境の別なく連携し、不信を信頼へ、憎悪を和解へ、分裂を融和へと、歴史の潮流を転換させなければならない」と言ったそうだ。今、混沌のさなかにある世界情勢を、ただ見ているだけでなく、先人たちの思いに耳を傾け、自分たちができることを探してみたいと思った。また、他人を思いやる気持ち、日常生活で感じられる安心、価値観の共有、共感に平和な社会を作っていくうえで、大切に、守っていくべきものだと思う。こうした思いをみんなと共有し、命の尊さ、平和の重要性を学び、考えたいと深く思った。

6. 平和記念資料館を見学して

この資料館に入って、被爆の実相を見たとき、僕は言葉を失った。被ばく者の言葉、書き残した日誌、穴が空き黒い雨が付着した衣服、どれも実際に広島という地で原子爆弾が投下されたことを現実味のあるものとして表していた。被ばく者の写真は被爆の状況を鮮明に、悲痛に表し原爆の恐ろしさを語りかけているように思えた。原爆の実相をより深く、悲痛な気持ちで感じた。

また、来館者が自由に書くことができるノートには世界中の人々が書いた資料館の感想や、平和への思い、願いがあった。世界中多くの人が平和を願っている中で、今日も戦争は世界で起こっている。この資料館を学び、「平和と命の尊さ」がわかった。シンプルだがいちばん大事で考えるべきことだと僕は思う。ここから僕ができることは、これから生きていく上で考えていきたい。

7. 非核平和の重要性とは

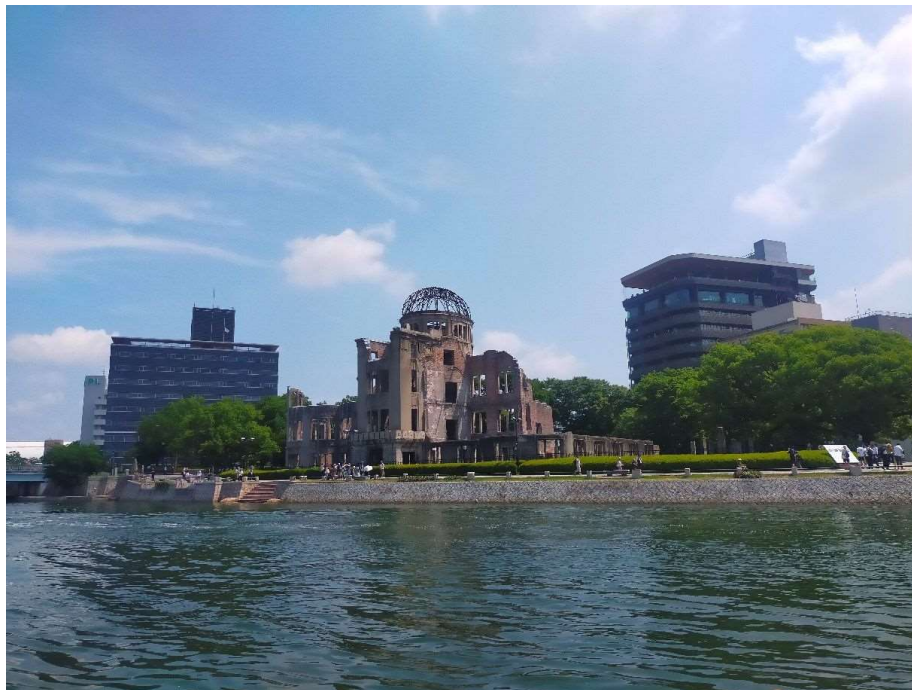
核とは、人々の生活を脅かす「脅威」そのものだと思う。核を持つ国が他の国の脅威になり、国ごとの「格差」が生まれてしまう。この「格差」こそが平和や人々の生活を脅かしていると思う。この「格差」をなくすにはどうしたらよいだろうか。

僕は、しっかり話し合い、「違い」を「良さ」と捉えることが重要だと考える。武力行使というのは、全く良いことが起きない。「違い」を否定しあうのではなく「良さ」ととらえ、永い平和を願う気持ちがあれば良いと思う。しかしこれは、核が存在する限り、存在し得ないと思う。非核平和はこの取り組みを世界全体で広めるために重要だと考える。

8. 全体の感想

この事業に参加して、僕は平和や正義の考え方が変わった。世界で2箇所しかない、原子爆弾が投下された「広島」という地を訪問して、語り部さんの話を聞いて、平和記念式典に参加して、平和記念資料館を訪れて、とても貴重な体験をさせてもらった。大切にすべきことは「平和」と「正しい正義」だと思う。「正しい正義」とは、「違いを認め合うための他人を考えた自分の信念」だと僕は思う。違いを認め合うための取り組みは日常生活でもできるはずだ。意見を無理やり押し通すのではなく、真剣に優しく話し合ったり、意見を尊重し

合う気持ちなどだ。この経験、考え方を校内で発表し、みんなが平和への理解を深めてほしい。



記録写真集
8月5日（月）



出発式



昼食



自己紹介



被ばく伝承者講話



てつのくじら館

8月6日（火）



式典会場



式典参列



原爆ドーム



昼食



解散式

広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式

HIROSHIMA PEACE MEMORIAL CEREMONY

令和 6 年(2024年) 8 月 6 日

August 6, 2024

広 島 市

The City of Hiroshima

式次第

Program

開 式	8 : 00	Opening
原爆死没者名簿奉納 広島市長 遺族代表	8 : 00	Dedication of the Register of the Names of the Fallen Atomic Bomb Victims Mayor of Hiroshima Representatives of the bereaved families
式 辞 広島市議会議長	8 : 03	Address Chairperson of the Hiroshima City Council
献 花 広島市長 広島市議会議長 遺族代表・こども代表 被爆者代表 来 賓	8 : 08	Dedication of Flowers Mayor of Hiroshima Chairperson of the Hiroshima City Council Representatives of the bereaved families and children Representatives of the atomic bomb survivors Distinguished guests
黙とう・平和の鐘	8 : 15	Silent Prayer and Peace Bell
平和宣言 広島市長	8 : 16	Peace Declaration Mayor of Hiroshima
放 鳩		Release of Doves
平和への誓い こども代表	8 : 24	Commitment to Peace Children's representatives
あいさつ 内閣総理大臣 広島県知事 国際連合事務総長	8 : 29	Addresses Prime Minister of Japan Governor of Hiroshima Secretary General of the United Nations
ひろしま平和の歌（合唱）	8 : 46	Hiroshima Peace Song (chorus)
閉 式	8 : 50	Closing

式 辞

本日ここに、岸田内閣総理大臣を始め、ご来賓各位、被爆者、ご遺族の方々のご臨席と、国内外から多くの皆様のご参列のもと、広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式を挙行するに当たり、原子爆弾の犠牲となられた多くの御霊に対し、謹んで哀悼の誠を捧げます。

79年前の8月6日、一発の原子爆弾により、筆舌に尽くし難い悲惨な体験をした被爆者は「こんな思いを他の誰にもさせてはならない」という切なる願いのもと、被爆の実相を伝え続けています。

しかしながら、世界ではロシアがウクライナへの侵攻に際し核兵器による威嚇を続けるほか、安全保障体制の強化を掲げ核戦力の増強を進める国があるなど、核兵器の使用という現実的な脅威で緊張が高まっています。

日本国憲法前文では「全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。」と謳われています。

戦後世代が大半となった現代を生きる私たちに求められるのは、自国のことのみに専念して他国を無視する国家の暴挙により平和が危機に瀕していることに目を向け、世界の誰もが平和を享受できるよう強い信念のもと連携して歩みを進めていくことです。

昨年5月のG7広島サミットは、各国の首脳が被爆地に集い、被爆者との対話を通して被爆の実相に触れた歴史的に大きな意味を持つ会合でした。

その中では「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」が独立の文書として世界に発信され、平和をゆるがせにすることがあってはならないことを共有しました。

国際社会は、この意義に改めて思いを致し、戦争と核兵器のない世界を創造するための具体的な行動へと繋いでいくことが重要であり、被爆地広島が果たすべき役割はますます大きくなるものと考えています。

私たちは、これからも平和を希求する人々と手を取り合い、世界恒久平和と核兵器廃絶の実現に向けて未来志向で全力を尽くすと、ここに改めてお誓い申し上げます。

本日の式典に当たり、原子爆弾の犠牲となられた御霊に対し、謹んでご冥福をお祈り申し上げますとともに、今なお原子爆弾の後遺症に苦しんでおられる皆様へ、より一層の援護をお願いいたします。式辞といたします。

令和6年（2024年）8月6日

広島市議会議員 母谷 龍典

Address

August 6, 2024

Today we are joined by Prime Minister Kishida Fumio, distinguished guests, *hibakusha*, and bereaved families, as well as citizens from Japan and around the world at the Peace Memorial Ceremony to pay our deepest respects to the many souls of the victims of the atomic bombing.

Seventy-nine years ago on August 6, the *hibakusha* experienced horrors too difficult to put into words. Under the banner of their fervent plea that “no one else should ever suffer as we have,” they have continued to convey the realities of the atomic bombing.

Despite this, tensions are on the rise across the globe today due to the real threat of nuclear weapons use, such as the continued nuclear intimidation used in the Russian invasion of Ukraine and the continued enhancement of nuclear forces by countries in the name of strengthening their security frameworks.

The preamble of the Japanese Constitution states, “We recognize that all peoples of the world have the right to live in peace, free from fear and want.” Today, the majority of people in this country are of the post-war generation. What is it that this generation must do? We must face the fact that peace is in danger because of the tyranny of nations that focus solely on their own country while ignoring others. We must also move forward in solidarity and with conviction so that everyone in the world, regardless of who they are, can enjoy peace.

The G7 Hiroshima Summit, held in May last year, was a summit of huge historical significance. World leaders gathered in the atomic-bombed city and learned of the realities of the bombing by speaking to a *hibakusha*. It was during this summit that the G7 Hiroshima Leaders’ Vision on Nuclear Disarmament, an independent document, was released to the world, sharing the sentiment that we must not neglect peace.

It is imperative that international society once again reflect upon the significance of the summit and ensure that it leads to concrete actions for a world without wars and nuclear weapons. To this end, I believe that the role that the atomic-bombed city of Hiroshima must play will only grow larger.

We hereby reaffirm our pledge to continue to be future-oriented and do all in our power for the realization of the abolition of nuclear weapons and of lasting world peace by joining hands with those who desire peace.

In closing, we offer our prayers for the peaceful repose of the souls lost in the atomic bombing. We sincerely hope that the *hibakusha*, who still suffer from aftereffects, will receive strengthened comprehensive care and support from the national government.

Motani Tatsunori
Chairperson
Hiroshima City Council

平 和 宣 言

皆さん、自国の安全保障のためには核戦力の強化が必要だという考え方をどう思われますか。また、他国より優位に立ち続けるために繰り広げられている軍備拡大競争についてどう思いますか。ロシアによるウクライナ侵攻の長期化やイスラエル・パレスチナ情勢の悪化により、罪もない多くの人々の命や日常生活が奪われています。こうした世界情勢は、国家間の疑心暗鬼をますます深め、世論において、国際問題を解決するためには拒否すべき武力に頼らざるを得ないという考えが強まっていないでしょうか。こうした状況の中で市民社会の安全・安心を保つことができますか。不可能ではないでしょうか。

平和記念資料館を通して望む原爆死没者慰霊碑、そこで祈りを捧げる人々の視線の先にある原爆ドーム、これらを南北の軸線上に配置したここ平和記念公園は、施行から今日で75年を迎える広島平和記念都市建設法を基に、広島市民を始めとする平和を願う多くの人々によって創られ、犠牲者を慰霊し、平和を思い、語り合い、誓い合う場となっています。

戦後、我が国が平和憲法をないがしろにし、軍備の増強に注力していたとしたら、現在の平和都市広島は実現していなかったのです。この地に立てば、平和を愛する世界中の人々の公正と信義を信頼し、再び戦争の惨禍が起こることのないようにするという先人の決意を感じることができるはずです。

また、そうした決意の下でヒロシマの心を発信し続けた被爆者がいました。「私たちは、いまこそ、過去の憎しみを乗り越え、人種、国境の別なく連帯し、不信を信頼へ、憎悪を和解へ、分裂を融和へと、歴史の潮流を転換させなければなりません。」これは、全身焼けただれた母親のそばで、皮膚がむけて赤身が出ている赤ん坊、内臓が破裂して地面に出ている死体…生き地獄さながらの光景を目の当たりにした当時14歳の男性の平和への願いです。

1989年、民主化に向けた市民運動の高まりによって、東西冷戦の象徴だったベルリンの壁が崩壊しました。かつてゴルバチョフ元大統領は、「われわれには平和が必要であり、軍備競争を停止し、核の恐怖を止め、核兵器を根絶し、地域紛争の政治的解決を執拗に追求する」という決意を表明し、レーガン元大統領との対話を行うことで共に冷戦を終結に導き、米ソ間の戦略兵器削減条約の締結を実現しました。このことは、為政者が断固とした決意で対話をするならば、危機的な状況を打破できることを示しています。

皆さん、混迷を極めている世界情勢をただ悲観するのではなく、こうした先人たちと同様に決意し、希望を胸に心をつにして行動を起こしましょう。そうすれば、核抑止力に依存する為政者に政策転換を促すことができるはずです。必ずできます。

争いを生み出す疑心暗鬼を消し去るために、今こそ市民社会が起こすべき行動は、他者を思いやる気持ちを持って交流し対話することで「信頼の輪」を育み、日常生活の中で実感できる「安心の輪」を、国境を越えて広めていくことです。そこで重要になるのは、音楽や美術、スポーツなどを通じた交流によって他者の経験や価値観を共有し、共感し合うことです。こうした活動を通じて「平和文化」を共有できる世界を創っていきましょう。特に次代を担う若い世代の皆さんには、広島を訪れ、この地で感じたことを心に留め、幅広い年代の人たちと「友好の輪」を創り、今自分たちにできることは何かを考え、共に行動し、「希望の輪」を広げていただきたい。広島市は、世界166か国・地域の8,400を超える平和首長会議の加盟都市と共に、市民社会の行動を後押しし、平和意識の醸成に一層取り組んでいきます。

昨年度、平和記念資料館には世界中から過去最多となる約198万人の人が訪れました。これは、かつてないほど、被爆地広島への関心、平和への意識が高まっていることの証しとも言えます。世界の為政者には、広島を訪れ、そうした市民社会の思いを共有していただきたい。そして、被爆の実相を深く理解し、被爆者の「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」という平和への願いを受け止め、核兵器廃絶へのゆるぎない決意を、この地から発信していただきたい。

NPT（核兵器不拡散条約）再検討会議が過去2回続けて最終文書採択できなかったことは、各国の核兵器を巡る考え方に大きな隔たりがあるという厳しい現実を突き付けています。同条約を国際的な核軍縮・不拡散体制の礎石として重視する日本政府には、各国が立場を超えて建設的な対話を重ね、信頼関係を築くことができるよう強いリーダーシップを発揮していただきたい。さらに、核兵器のない世界の実現に向けた現実的な取組として、まずは来年3月に開催される核兵器禁止条約の第3回締約国会議にオブザーバー参加し、一刻も早く締約国となっていただきたい。また、平均年齢が85歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、在外被爆者を含む被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆79周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、改めて被爆者の懸命な努力を受け止め、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。皆さん、希望を胸に、広島と共に明日の平和への一步を踏み出しましょう。

令和6年（2024年）8月6日

広島市長 松 井 一 實

PEACE DECLARATION

August 6, 2024

Citizens of the world, what do you think? Are more powerful nuclear forces necessary for national security? What about arms races, competing to maintain superiority over other nations? Russia's protracted invasion of Ukraine and the worsening situation between Israel and Palestine are claiming the lives of countless innocent people, shattering normal life. It seems to me that these global tragedies are deepening distrust and fear among nations, reinforcing the public assumption that, to solve international problems, we have to rely on military force, which we should be rejecting. Given such circumstances, how can nations offer safety and security to their people? Is that not impossible?

Through the pillars under the Peace Memorial Museum, we can see the Cenotaph for the A-bomb Victims. Anyone praying at the Cenotaph can look straight through it to the Atomic Bomb Dome. Peace Memorial Park, with these structures on its north-south axis, was built in accordance with the Hiroshima Peace Memorial City Construction Law, enacted seventy-five years ago today. Built by the people of Hiroshima and many other seekers of peace, it has become a place to memorialize the victims and to think, talk, and make promises to each other about peace.

If, after the war, Japan had abandoned our Peace Constitution and focused on rebuilding our military, the city of peace Hiroshima is today would not exist. Standing here, we can all feel our predecessors' determination to eliminate the scourge of war, trusting in the justice and faith of peace-loving people around the world.

Expressing that determination, one *hibakusha* continually communicated the spirit of Hiroshima. "Now is the time to turn the tide of history, to get beyond the hatreds of the past, uniting beyond differences of race and nationality to turn distrust into trust, hatred into reconciliation, and conflict into harmony." This uplifting sentiment was written by a man who, as a 14-year-old boy, saw scenes from a living hell—a baby with skin peeled down to red flesh next to its mother burned from head to toe, and a corpse with its guts strewn out on the dirt.

In 1989, a massive people's movement for democracy brought down the Berlin Wall, the predominant symbol of the Cold War. President Gorbachev expressed humanity's collective need for peace and his determination to stop the arms race, end nuclear terror, eradicate nuclear weapons, and relentlessly pursue political solutions to regional conflicts. He and President Reagan worked together through dialogue to bring the Cold War to an end, which led to the United States and the Soviet Union concluding the Strategic Arms Reduction Treaty. They demonstrated that policymakers can overcome even critical situations through resolute commitment to dialogue.

Let us not be resigned to pessimism about the chaotic world situation. Instead, let us be as determined as our forebears, and, united as one, with hope in our hearts, take collective action. Our unity will move leaders now relying on nuclear deterrence to shift their policies. We could make that happen.

To extinguish the suspicion and doubt that create conflicts, civil society must foster a circle of trust through exchange and dialogue with consideration for others. We must spread beyond national borders the sense of safety we feel in our daily lives. The crucial step here is to share and empathize with the experiences and values of others through music, art, sports, and other interactions. Through such exchange, let us create a world in which we all share the Culture of Peace. In particular, I call on our youth, who will lead future generations, to visit Hiroshima and, taking to heart what they experience here, create a circle of friendship with people of all ages. I hope they will ponder what they can do now, and act together to expand their circle of hope. The city of Hiroshima, working with Mayors for Peace, which now has more than 8,400 member cities in 166 countries and regions, will actively support community endeavors to raise peace consciousness.

Last fiscal year, approximately 1.98 million people from around the world visited the Hiroshima Peace Memorial Museum. This record number is evidence of unprecedented interest in the atomic-bombed city and a rise in peace consciousness. My hope is that all world leaders will visit Hiroshima, experience the will of civil society, gain a deeper understanding of the atomic bombing, and hold in their hearts the *hibakusha* plea, “No one should ever suffer as we have.” Then, while they are here, I hope they will, with iron resolve, issue a compelling call for the abolition of nuclear weapons.

Twice in a row the Nuclear Non-proliferation Treaty (NPT) Review Conference has failed to adopt a final document. These failures have revealed a harsh reality, namely, the enormous differences among countries with respect to nuclear weapons. I hope the Japanese government, which has declared repeatedly that the NPT is the cornerstone of the international nuclear disarmament and non-proliferation regime, will exercise strong leadership, calling all countries to transcend their positions and engage in constructive dialogue toward a relationship of trust. Furthermore, I request that Japan, as a practical effort toward a nuclear-weapon-free world, participate as an observer at the Third Meeting of States Parties to the Treaty on the Prohibition of Nuclear Weapons to be held in March next year. Subsequently and as soon as possible, Japan must become a party to the treaty. In addition, I demand that the Japanese government strengthen measures of support for the *hibakusha*, including those living outside Japan. Now that their average age has exceeded 85, the government must accept that they are still suffering the many adverse emotional and physical effects of radiation.

Today, at this Peace Memorial Ceremony marking 79 years since the bombing, we offer our deepest condolences to the souls of the atomic bomb victims. Together with Nagasaki and likeminded people around the world, remembering once again the *hibakusha* struggle, we pledge to make every effort to abolish nuclear weapons and light the way toward lasting world peace. Citizens of the world, let us all, with hope in our hearts, walk with Hiroshima toward tomorrow’s peace.

MATSUI Kazumi
Mayor
The City of Hiroshima

平和への誓い

目を閉じて想像してください。

緑豊かで美しいまち。人のにぎわう商店街。まちにあふれるたくさんの笑顔。

79年前の広島には、今と変わらない色鮮やかな日常がありました。

昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分。

「ドーン！」という鼓膜が破れるほどの大きな音。

立ち昇る黒味がかかった朱色の雲。

人も草木も焼かれ、助けを求める声と絶望の涙で、まちは埋め尽くされました。

ある被爆者は言います。あの時の広島は「地獄」だったと。

原子爆弾は、色鮮やかな日常を奪い、広島を灰色の世界へと変えてしまったのです。

被爆者である私の曾祖母は、当時の様子を語ろうとはしませんでした。

言葉にすることさえつらく悲しい記憶は、79年経った今でも多くの被爆者を苦しめ続けています。

今もなお、世界では戦争が続いています。

79年前と同じように、生きたくても生きることができなかった人たち、

明日を共に過ごすはずだった人を失った人たちが、この世界のどこかにいるのです。

本当にこのままでよいのでしょうか。

願うだけでは、平和はおとずれません。

色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。

一人一人が相手の話をよく聞くこと。

「違い」を「良さ」と捉え、自分の考えを見直すこと。

仲間と協力し、一つのことを成し遂げること。

私たちにもできる平和への一歩です。

さあ、ヒロシマを共に学び、感じましょう。

平和記念資料館を見学し、被爆者の言葉に触れてください。

そして、家族や友達と平和の尊さや命の重みについて語り合いましょう。

世界を変える平和への一歩を今、踏み出します。

令和6年（2024年）8月6日

こども代表

広島市立祇園小学校6年

広島市立八幡東小学校6年

かとう
加藤
いしまる
石丸

あきら
晶
ゆうと
優斗

Commitment to Peace

August 6, 2024

Close your eyes and imagine:

a beautiful city of verdant green, a shopping street full of people, smiling faces across the town.

Hiroshima 79 years ago was filled with people living colorful day-to-day lives, much like today.

On 8:15 am on August 6, 1945,

there was a great, eardrum-splitting roar

and a vermillion cloud tinged with black rose into the sky.

People and plants alike were blackened in the blaze and the city was drowned in cries for help and tears of despair.

In the words of one *hibakusha*, Hiroshima on that day was hell on earth.

The atomic bomb stole the color from their lives and turned Hiroshima into a world of ash gray.

My great grandmother was a *hibakusha*, but she never spoke of that day.

Sorrowful memories, too painful to put into words, still continue to torment many of the *hibakusha* today, 79 years later.

Even now, wars continue to plague the planet.

Around the world, those who didn't want to die are dying,

and people are losing loved ones who were supposed to be there with them day after day,

much the same as it was 79 years ago.

Is there really no other way?

Peace will not come from prayers alone.

It is up to us to protect our colorful day-to-day lives and build peace.

Listening carefully to others,

viewing differences as a good thing and reconsidering your perspective,

cooperating with friends to accomplish a goal:

these are all steps that each of us can take toward peace.

Now is the time for us to learn about and experience Hiroshima together.

Visit the Peace Memorial Museum, listen to the words of the *hibakusha*,

and discuss the preciousness of peace and the importance of life with family and friends.

Here, we take one step forward to world-changing peace.

Children's Representatives:

Kato Akira (6th year, Hiroshima City Gion Elementary School)

Ishimaru Yuto (6th year, Hiroshima City Yahata-Higashi Elementary School)

ひろしま平和の歌

Hiroshima Peace Song

広島市選定
重園賛雄 作詞
山本秀 作曲

Selected by Hiroshima City
Words by Yoshio Shigezono
Music by Minoru Yamamoto

ひろしま平和の歌を
みなさんと合唱しましょう

Let's sing the Hiroshima
Peace Song together

- 1 雲白くたなびくところ
空のはて東に西に
おお高くこだまひびけと
鐘は鳴る平和の鐘に
いまわれら雄々しく起ちて
その栄えここに興さん

- 1 Kumo shiroku tanabiku tokoro
Sora no hate higashi ni nishi ni
O takaku kodama hibike to
Kane wa naru heiwa no kane ni
Ima warera o-oshiku tachite
Sono sakae koko ni okosan

- 2 波青くたゆとおとところ
海のはて南に北に
おお遠く祈りとどけと
鐘は鳴る平和の鐘に
いまわれら試練を越えて
その行手ここに仰がん

- 2 Nami aoku tayuto tokoro
Umi no hate minami ni kita ni
O toku inori todoke to
Kane wa naru heiwa no kane ni
Ima warera shiren o koete
Sono yukute koko ni aogan

- 3 風清くかがやくところ
国のはて世界の友に
おお熱く想いかよえと
鐘は鳴る平和の鐘に
いまわれら手をさし伸べて
その睦みここに歌わん

- 3 Kaze kiyoku kagayaku tokoro
Kuni no hate sekai no tomo ni
O atsuku omoi kayoe to
Kane wa naru heiwa no kane ni
Ima warera te o sashinobete
Sono mutsumi koko ni utawan

広島市を世界平和の原点にしようという願いから、昭和22年8月に「平和祭」を挙げるにあたり、同年7月、主催団体である広島平和祭協会（会長 広島市長 浜井信三）が歌詞を公募し、豊田郡の中学校教師 重園賛雄氏の作品が選ばれ、山本秀氏（広島教育音楽連盟）が作曲しました。

敬けんな祈りの中で厳粛に行われた同年8月6日の第1回平和祭で高らかに合唱されました。以後、平和記念式典で歌い継がれている清らかな歌です。

協 力 団 体 等

吹奏楽団

広島市立基町高等学校
広島市立舟入高等学校
広島市立広島商業高等学校
広島市立国泰寺中学校
広島市立翠町中学校
広島市立宇品中学校

合唱団

NHK広島児童合唱団
ハーモニー・イオ
広島合唱同好会
広島市役所合唱団
広島ジュニアコーラス
広島ジュピター少年少女合唱団
広島ジュピター少年少女合唱団保護者会合唱団
広島少年合唱隊
広島少年合唱隊父親・母親コーラス
広島市立舟入高等学校
広島市立基町高等学校
広島大学東雲混声合唱団パストラル
広島中央合唱団
鯉城ステア・コール
蓮照寺エコー合唱団

放 鳩

広島中央競翔連合会
山陽競翔連合会
日本伝書鳩協会
日本伝書鳩協会広島支部
日本伝書鳩協会広島北クラブ
日本伝書鳩協会呉支部

市民代表献花及び「花一輪運動」用切花

株式会社 花満
広島県花き商業協同組合
広島県花卉園芸農業協同組合
広島生花出荷協同組合
広島市三友生花卸売商業組合

パンフレット及び切花の配布

広島県連盟広島地区ボーイスカウト
広島県連盟安佐地区ボーイスカウト
ガールスカウト広島県連盟

おしほり接待及び会場案内

広島市青年連合会

介助支援

社会福祉法人 広島市社会福祉協議会
ボランティア情報センター

通 訳

公益財団法人 広島平和文化センター

Support Organizations

Wind Ensembles

Hiroshima Municipal Motomachi High School
Hiroshima Municipal Funairi High School
Hiroshima Municipal Commercial High School
Hiroshima Municipal Kokutaiji Junior High School
Hiroshima Municipal Midorimachi Junior High School
Hiroshima Municipal Ujina Junior High School

Choirs

NHK Hiroshima Children's Chorus
Harmony Io
Hiroshima Chorus Association
Hiroshima City Hall Chorus
Hiroshima Junior Chorus
Hiroshima Jupiter Boys and Girls Choir
Hiroshima Jupiter Boys and Girls Choir Parents Chorus
Hiroshima Boys Choir
Hiroshima Boys Choir Fathers and Mothers Chorus
Hiroshima Municipal Funairi High School
Hiroshima Municipal Motomachi High School
Hiroshima University Shinonome Mixed Chorus Pastoral
Hiroshima Chuo Chorus
Rijo Sutea Call
Renshoji Echo Chorus

Release of Doves

Hiroshima Central Racing Pigeon Association
Sanyo Racing Pigeon Association
The Japan Carrier Pigeon Association
Hiroshima Branch of the Japan Carrier Pigeon Association
North Hiroshima Club of the Japan Carrier Pigeon Association
Kure Branch of the Japan Carrier Pigeon Association

Flowers provided by:

Hanaman Co., Ltd.
Hiroshima Prefecture Commercial Cooperative of Florists and Gardeners
Hiroshima Prefecture Floriculture Cooperative
Hiroshima Floral Shipping Cooperative
Hiroshima City Sanyu Floral Business Association

Distribution of Pamphlets and Flowers

Hiroshima District Boy Scouts
Asa District Boy Scouts
Girl Scouts of Japan, Hiroshima Council

Towel Service and Information

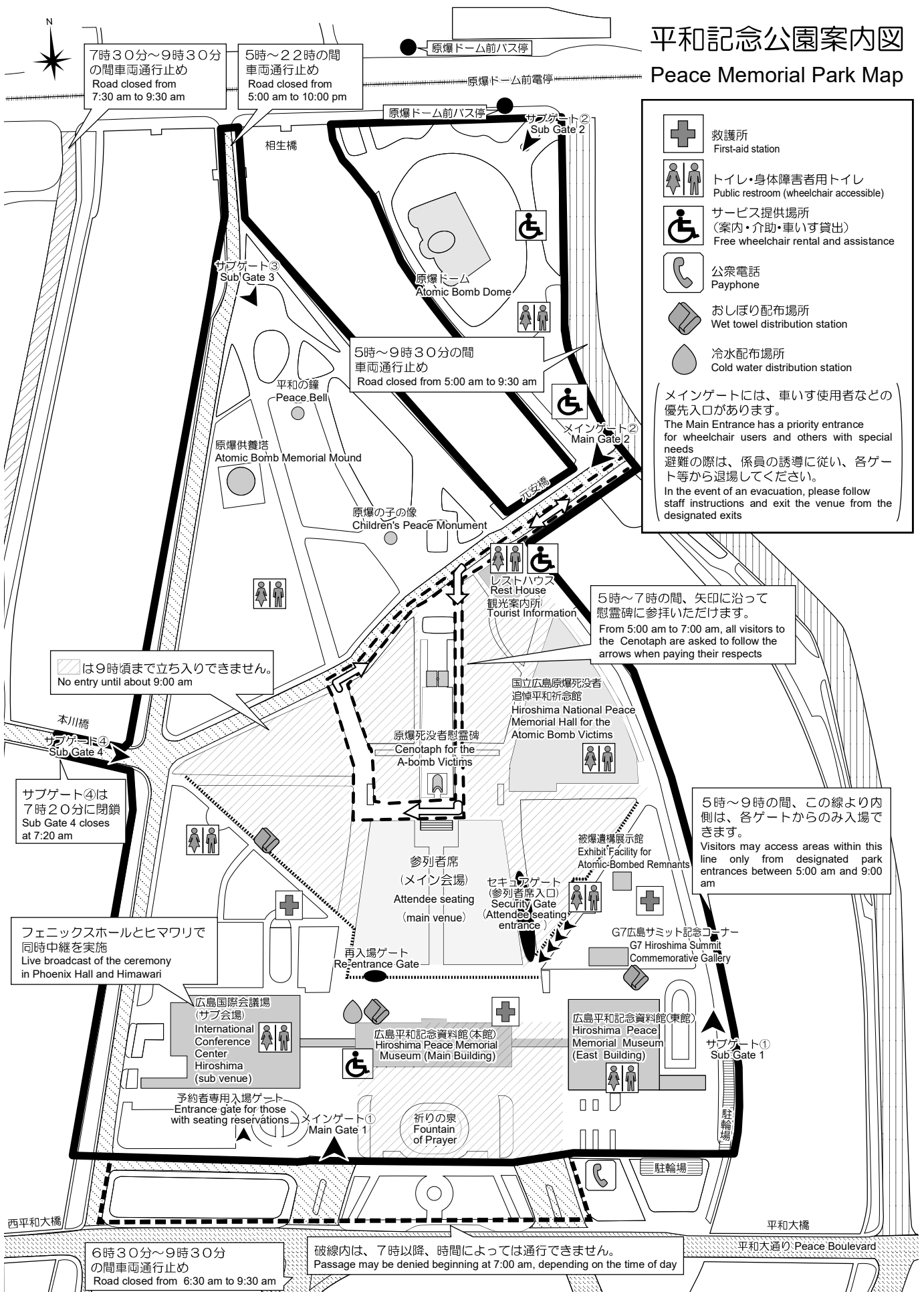
Hiroshima City Youth Association

Assistance

Hiroshima City Social Welfare Council
Volunteer Information Center

Interpretation services provided by:

Hiroshima Peace Culture Foundation





広島市章
Hiroshima City Emblem

広島平和記念資料館からのご案内

8月6日の開館時間は午前9時（予定）から午後9時までです。
現在、非常に多くの方にご来館いただいております、
チケットの購入に長時間お並びいただく場合がございますので、
入館の際は、WEBチケットの利用をおすすめします。

- ① 右の二次元コードをお手持ちのスマートフォン等で読み取り、
WEBチケットを購入してください。
- ② 購入が完了するとメールでWEBチケットが届きます。
- ③ WEBチケット購入済みの方専用の列にお並びいただき、
館内のスタッフにWEBチケットを提示してください。

【日本語】



Announcement from the Hiroshima Peace Memorial Museum

The opening hours of the museum on August 6 is from 9:00 a.m. to 9:00 p.m.
The museum currently receives a large number of visitors.
Visitors may be required to wait for a long time to purchase tickets on-site.
We highly recommend purchasing tickets online in advance.

1. Scan the 2D code on the right with your device (smartphones, etc.) to
purchase online tickets.
2. Once the purchase is complete, you will receive the tickets via email.
3. Please join the queue for those who already have online tickets and
display your tickets to the staff when entering the museum.

【English】



豊島区中学生広島派遣報告書

発 行 日：令和6年11月

発行・編集：豊島区総務部総務課

〒171-8422

東京都豊島区南池袋二丁目45番1号

TEL：03（3981）1111